

春を告げるように芽吹くミツマタの木

小 関 栄

この界隈の山野には、小枝をたくさんつけたミツマタ(三桠、三叉)の木が自生している。背丈は低く草の間に交じっていて、枯れたような小枝ばかりの木であまり目立たないが、三月に入ると、その小枝の先端の白い小さな蕾がほころび始め、しっかりと春を告げている。

(右の写真は近くの家の庭先で3/1撮影)

春の彼岸が近くなると、その枝先の蕾がほのかな香りを放して開き始める。花一輪は小さいが、たくさんの筒型の花が蜂の巣状に束になると、実に華やかだ。(左下の写真、3/20撮影)

沈丁花(ジンチョウゲ)と同じ仲間によく似ているが、黄褐色の細かい小枝がすべて三叉に分かれて素性よく延びている、これが名前の由来。



ミツマタの木は、表皮と木質部の間の白皮繊維が強靱で楮(コウゾ)とともに和紙の原料になっている。

静岡県特産の駿河半紙は江戸時代の昔から、美濃和紙、土佐和紙とともに、このミツマタの木の皮を漉いて作られていて、シミが出来にくく、つやがある良質の和紙として好評だ。主に奉書、賞状、紙幣などに使われている。ミツマタの花言葉は「壮健」。また、この花は、俳句では早春の季語になっている。

ミツマタの 枝先芽吹き 花支度 淡水

『21世紀の資本』と富国安民

北海道報徳情報編集発行人 柴田 浩一郎

フランスの経済学者トマ・ピケティの著作、『21世紀の資本』が我が国でも異例の増版を重ねています。ご承知のように資本主義における経済格差拡大の実態を統計的に証明した著作で、新自由主義経済を標榜する経済学者や政治家との論争に終止符を打つものとして注目されています。この格差拡大の問題は我が国を含めて世界的な政治問題となっていますが、格差是正のためには政治的解決策が不可欠であることを証明した意義は大きいと言われています。ピケティ氏によれば、過去200年の間、資産を持つ者と持たない者との間で、経済格差は拡大しており、所得の再配分は行われてこなかったこと、特に新自由主義者が主張する「トリクルダウン」理論は歴史上実行されることはなかったと言います。そのため、税制や社会政策によって所得の再配分を行うことが、国の発展にとって有効絵であると主張しています。(4頁に続く)